

—海外だより—

ナイジェリアいろいろ

—異文化社会での三年間—

越 智 良 三*



写真1 帰国直前。現地職員から贈られた民族衣裳を着て、秘書と。わかりやすい英語を喋ってくれる文字通り有能な祐筆だった。

筆者は 1978 年から 3 年 1 か月間、ナイジェリア共和国で亜鉛鉄板製造合弁企業（日、英、60%、現地 40%）の経営に当たった。アフリカ生活を終わって帰国した直後は、見るもの聞くものすべて大平の夢をむさぼっている情眼中の日本と映り、逆カルチャーショックを受けた。

あふれんばかりに豊富な消費材、「湯水のように」使い捨てられている飲める水、治安の良さ（車で夜道を走っても襲われる心配がなく、戸締りにも神経を尖らせずに熟睡できる等々）停電が新聞種になる程に安定した電力供給（1日に 22 回停電した時は全く参った）電話・公共交通、どれをとつても整っており、おどろくばかりである。これら生存にかかわる基本的諸条件が現在ある状態を自然で当たり前のこととして、ありがたいと感じていないのみか、不満顔すら浮かべている日本市民を見るにつけ、私の眼には罰当たりの群と映つてならない。

部族主義・多様性の国

アフリカ諸国は程度の差こそあれ多数部族の寄り合い所帯で、日本のような単一民族国家はない。広く言えばアフリカはおろか全世界どこを見渡しても我が国のよう

な均質な国が存在しない。現在アフリカ大陸には 57 の独立国があり、いずれも 1960 年前後に相ついで独立した（与えられた）国々で、もと英・仏・オランダ・ベルギー・スペイン・ポルトガル領植民地であつた。植民地の国境はこれら列強の力関係によつて人為的政治的に線引きがなされたもので、それが独立時にそのまま固定されて国境となつたから、同一部族が西はもと仏領、東はもと英領に二分され、土語は共通だが公用語は片や仏語、こなた英語という悲劇が各地に残っている。

さてナイジェリア・アフリカ大陸西海岸に位置し大西洋に面している。（慌て者がよくアルジェリアと混同するがこの方は地中海に面している。）大陸随一の地下資源と人的資源をもつ。良質原油 200 万バレル/日と 8000 万の人口を誇る。250 の多数部族から成つており、このうちハウサ（内陸北部を中心に 25% を占め回教系）、ヨルバ（南西沿岸部・18%・キリスト教と小数回教）、イボ（南東部・17% キリスト教）の三大部族で全体の 60% を占め、政治経済がこの鼎の^{かなえ}バランスの中で動いている。残る小部族は地域別に上記大部族の影響下にある。この三大部族はそれぞれ全く異なる言語・習慣伝統をもち、共有しているものは公用語たる英語と中央政府だけである。19 州の地方分権制をとつており、そのうち内陸中央部に位置する新首都州（ブラジリアのナイジェリア版）へ 85 年までに首都を移転すると称していたが、諸事おくれがちのお国がらゆえ当てにしている者は少ない。オイルマネーも急速に底をついているはずなのに、ソ連の技術援助による一貫製鉄所の建設も続行しているし、そこそこに壮大なむだ使いをしていると映る。議論ずきで弁解上手、それも弁解がましくなく堂々と折伏されそうな修辞力のみごとさについてお人好しの日本人はだまされる。見ていてハラハラするような非能率、腐敗、無計画性が横行しており、近代と中世が共存している有様は、さながらタイムマシンに乗つて遠く江戸か元亀天正時代にさかのぼつた感がある。そこへ極めて現代的に大型ジェット機が飛びかい、カラーテレビが現れ、都市では車の渋滞が起きている。私たちのご先祖が外来文明をとり入れたさまざまな時代に演じたであろう混乱、消化不良が、一挙にいままとめて同時発生しているのを眼前に見る思いがする。この国の人たちは個々に見れば自分と家族の生活を維持向上させようとする意欲は十分にもつている。加えて大家族主義も根強く残つており、血縁を頼りの相互扶助システムが機能し、成功者に寄生することは日常茶飯事である。これが義務感によつてではなく、当為として双方が受認している。いどこでもはとこでも更には妾の連れ子でもブラザーまたはシスターで総称され、要するに縁者は皆きょうだいなのだ。このように公的な社会福祉制度の不備を補う自衛の知恵が小集団ごとに働いている。ためかあらぬか、これが規模を大きくした都市・州・国家のレベルになると意志統

* 日本ロータリーノズル(株)取締役

一がきわめて難しいというデメリットとなつてはね返つている。かんかんがくがくの議論は皆さん好んでするし、エネルギーに動いてはいるが、全体としてはブラウン運動でしかなく、大集団として捉えてみると進歩発展への力の結集に欠ける。79年に民政復帰し、第三世界ではまれに見る議会民主主義体制に入つた後83年8月に行われた第二期選挙も大かたの懸念を裏切つて平穩裡に済み大統領は再選され与党勢力も安泰と報じられている。

徐々にではあるがブラックアフリカの巨人は統一と安定の方向に進んでいるようだ。

所かわれば品かわる

その①. コックに味噌汁の作り方を教えたある単身赴任者。食卓についたらまず味噌汁が出て来た。飯もおかずも出て来ない。催促したら『旦那、スープがお済みにならないとあとはお出せません』

②現地人労務課長、ある日、報告に来て曰く『労働者台帳を再点検したら、とうに定年を過ぎている者が在籍していることがわかつたので即刻解雇致したい』即OKをあたえた。タイプで打ち上げた英文解雇通告書を受けとつた当のご本尊、慌てて労務課に駆けこんで抗議して言うのに「私が55才をこえた老人などとはとんでもない間様がだからこれは取り消してもらいたい」「お前さんそう言うが記録上は58才のはずだよ』いろいろ押問答の末わかつて来た「実は私は読み書きができないので入社時の書類を代筆で出したからその時の記入ミスと思われる。私の顔を見てほしい。年寄りに見えますか?」「よしわかつた。しからば本当の年齢は何才なのか」「アバウト38です」「必要書類を揃えて再手続をせよ』ざつとこんな塩梅である。さて戸籍制度が無いに等しいこの国では、自分の生れ年を正確に覚えているのはまじな方でさらに年月日まではつきり言える者は相当なハイレベルなのだ。本籍地には戸籍謄本が存在しない彼に残された道は、裁判所に行つて宣誓供述書を作ることである。この宣誓裁判所は原告と被告が衝突する利害を争う場所ではなく、ある事実を裁判官の前でバイブルまたはコーランと当人の良心にかけて誓い、裁判官が署名することにより公的な効力が発生するしくみとなつている。私も別件で二度ばかり供述書を作つた経験がある。田舎の診療所風の廊下で順番を待つうちに呼出しがあり入廷する。法服をまとつた裁判官が眼鏡ごしにじろりと視線を走らせてから人定訊問に入る。次に宗教を聞かれる。一応仏教徒と答える。この際無宗教と答えるのは禁物。さすがに仏教々典は備品がないらしく、左手は手ぶら右手は拳手して、あらかじめ提出してある供述書を裁判官殿が一条ごとに区切つて読み上げてくれるのを復唱する。全文が終わると彼は「以上の記載内容が事実と相違ないことを汝は汝の良心にかけて誓うや?」ときく。「Yes, I do.」これで終わり。話が横道にそれたが、58

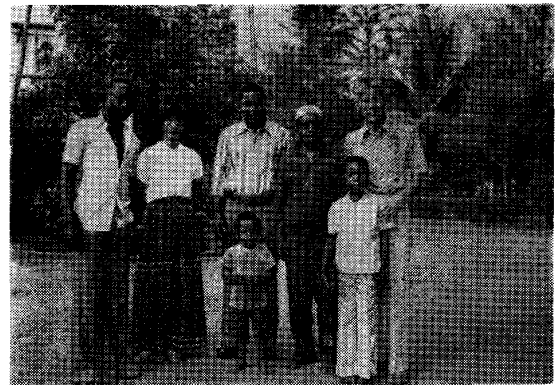


写真2 赴任直後。門番(ユニホーム姿)・捨吉父子と左端は居候。

才あらため38才騒ぎが一件落ち着いたことは言うまでもない。

③二度目の正月を迎えた朝。雑煮などは略して、日常どおりのトーストとコーヒーの朝食をとる。いつもの癖で砂糖をたつぶりいれてかきまわして口に運んだ家内、ペッと吐き出す。『これ何だか変な味がするわ』砂糖壺を調べると淡黄色の異物が点在する。これを集めて後日の調査用に保存。仕事始めの日労務課長にこれを示し意見を求める。言下に「これはlove potionです」辞書をひくと「ほれ薬」とある。この一語で事件の全容がすぐわかつた。大晦日にジュリアンに配置転換を予告してあつたのだ。ジュリアン、誇り高きヨルバ族。性正直だが気は強く門番とよく喧嘩をやる。そそつかしくよく物をこわす。妊娠しては流産をくりかえし出欠常ならず。私たち夫婦の間では百合子と命名していた。ちなみに住みこみのコック、スティーブンには捨吉と名をつけ夫婦間の符牒とした。

さて百合子、配転命令を奥女中から大部屋への左遷と感じとりその原因が主人の愛情がうすれたためとして一たん失われかけた愛情を呼び戻すために部族に代々秘伝の妙薬を一服盛つたもの。片思いの時も用いられるらしいが今回の場合、速効性を狙う余り匙加減が濃すぎてバレてしまった。害意のないことがわかつて一安心。『可愛いところあるわねえ。でも薬は利かないみたい』かくして百合子は置毒の罪を問われることなく工場食堂に配転となりこの一件も落着。

④ファッション：この国の人たちは陽気でおしゃれ。カラフルな民族衣裳と帽子が正装。男性の帽子は花咲爺さんの頭巾風とかトルコ帽など部族や身分によつてまちまちだが女性の場合は金らんどんすを巧みに折りたたんで巻きつけた豪勢なものとなる。細君の肥つているのが亭主の甲斐性とされている土地柄を反映して、ヘビイウエイト級の奥さん連中が外股でのつしのつしと歩く図は壯観である。西欧スタイルも共存しており天然の縮れつ毛をある整髪剤でまつすぐにのぼして更にゆるやかなウェーブをつけることがはやりはじめた。洋の東西(いや



写真3 X'mas パーティのひとこま。ビールは日本と同じサイズ。味は国際水準を行く。右端は労務課長。

南北か)を問わず、まつすぐな髪はちぢらせたい、ちぢれたやつのはぼしたい、いやお忙しいことである。男女を問わず皮膚の黒と主張の強い原色とがよくマッチして我々ならチンドン屋になる所をさらりと着こなしているのは見事の一語につきる。

⑥水と日本人

蛇口をひねりさえすれば良質の飲料水がほとぼしるものと思いきこんでいる日本人は、一たん外国に出ると大がいは参る。水乱費型パターンがしみこんでいるのだ。

滞在三年のうち最後の一年間水道水が一滴も出ない生活を経験してつくづく思つた。私の場合はそれでも恵まれている方で、工場の井戸から工業用水を社宅に運ばせ、質的には不便したが量的には困ることはなかつた。工業用水は地下 150m から汲み上げた鉄分の多い水で、風呂洗濯にはそのまま使つた。おかげで毎日入る風

呂は別府か登別の色加減を楽しめたが、飲用炊事用はこうもいかずまず大鍋にとつて煮沸し、湯ざましを汙過器にかけてゆつくりとこし、空瓶につめて冷蔵庫にためる。夫婦二人でこの処理済の水の使用量は一日 10 l くらいだつたらうか。土地の人たちの水消費は極めてつましいもので 2 l くらいの空き缶一杯分で全身を洗うし、なければならぬで済むようだし、それでいて小ざつぱり洗濯の利いた衣服をまとつている。この影響をうけ、帰国後しばらくの間、小用を足したあと景気よく水洗を流すことは苦痛だつたし今もその心情が残つていて時々家人から「よく流しておかないから臭い」と文句を食う始末。生命を維持するに必要な経口摂取量が一日ひとり当たり 3 l とされているが日本の平均的都市での生活用水消費量が 270 l を示しており年ごとに増加傾向にあると聞く。この差 260 l 強の水を市民ひとりびとりが毎日使い捨てているとは驚くほかはない。それでいて毎年夏になると水不足の、ダム建設の、と騒ぐのはどこか歯車が狂つていないのか。天を恐れざる所業と言うべきである。90% 以上の再使用率に達している製鉄業には及第点が与えられる。

むすび

豊富と潤沢、平穏な社会。中にいれば当たり前のような事がらも外に出て見なおすともつたないくらいにありがたいことなのだ。今後日本に天罰が下るか否かは我々と子孫たちの生きざまにかかつている。

『アフリカの水を飲んだ者は必ず戻つて来る』という諺のあるなつかしいあの大陸を再び訪れるのはいつの日か。